

# 南の風 449

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

448号の続きです。

教師側が「子どもたちは、授業内容を全受容する」という前提に立った指導法で学習を進めてしまうと、「こういった授業をすれば、子どもたちはこう変わる」、「こううまくいく」と、子どもたちへの力学をあたかも予測可能なものとして扱ってしまうようになります。

しかし、実際はそうではありません。子どもたちはその授業を部分受容しかしなかったり、拒絶したりするかもしれないのです。だからこそ、教師は授業の質を高め、さまざまな工夫を凝らして指導力を高めていきます。子どもたちが全受容するという前提では、本質的な「授業の質」は高まらないのです。

これはスポーツの指導者にとっても同じことがいえると思います。自分が指導したことを、選手たちは「全受容すべきだ」という前提にたっていないでしょうか？ 選手の側の受け取り方は千差万別です。相手は機械ではなく、一人ひとり個性ある人間です。我々指導者はそのことを十分考慮した上で、スポーツを指導しなければならないと思います。それができなければ、選手の意欲を無視することになります。意欲を引き出そうとは考えずに、意欲を持って指導を受けるべきだという前提で、指導を進めてしまうことになるのです。その姿勢が、指導者としての成長を妨げるのです。

学校の授業でも、子どもたちは先生が指導する内容を全受容したり、部分受容したり、拒絶したり、無視したりするということを紹介しました。しかし、多くの場合、子どもたちは「全受容したふり」をします。なぜなら先生の側に「評価」や「選抜」の権限があるからです。教育と言うシステムは、選抜という力学が機能しています。入試では、得点や内申点によって「合格」と「不合格」に選抜します。その選抜があるため、選抜を重視している子どもたちは授業の内容がどうであっても「全受容したふり」をすることになります。

この「全受容したふり」こそが、指導者側の落とし穴になるのです。自分がおこなった練習をよりよくしたいと思っていても、まだまだ未熟な練習をしてしまうことがあります。それでも、選手たちはその指導者の練習を一生懸命に「全受容」します。

しかし、それは本当に全受容なのでしょう？ 全受容した振りをさせてしまっていないでしょうか？ 試合に誰を出すかという選抜の権限を指導者が握っているから、選手たちは練習を全受容したふりをするのかもしれませんが。

選抜の力学がある以上、試合に出たい選手はどんな練習があってもがんばります。指導者の言うことを聞き、積極的に行動します。それは指導力によるものなのでしょうか？ そうである場合もありますし、そうでない場合もあるということです。

選抜という力学がないところでも、選手たちが意欲的に練習に取り組んでくれるとしたら、それが正真正銘の信頼関係、尊敬を土台にした関係と言えるのかもしれませんが。

私は、指導者として人をその気にさせるというつかみどころのない能力を磨くためには、選抜の権限というフィルターを超えて、選手から信頼と尊敬を集められなければならないと思っています。